

日本医学会長  
 門田 守人 先生  
 日本医学会副会長／日本医学会連合あり方委員会委員長  
 門脇 孝 先生  
 日本医学会副会長／日本医学会加盟検討委員会委員長  
 森 正樹 先生  
 日本医学会事務局  
 高橋 秀典 様

一般社団法人 日本体力医学会  
 理事長 鈴木 政登

一般社団法人日本体力医学会 活動報告について

拝啓 時下益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本体力医学会の活動報告と貴会への期待と要望を下記にお送り申し上げます。ご査収いただけますようお願い申し上げます。

敬具

[日本体力医学会の過去5年間の活動]

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる日本体力医学会の独自の活動

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

1. 総務委員会

1) 体力医学会の活動の大きな二つの柱は「学会大会開催」と「学会誌発行」である。総務委員会では年次学会大会の大会長・大会事務局と連携して、運営がうまくいくよう調整を行っている。過去5年間の学会大会参加者、演題数（口頭発表、ポスター発表）の推移は以下の表の通りである（2020年はコロナ禍によりWeb開催であったので、口頭発表はなかった）。

回数	開催都市	日程	大会長	参加者数	演題計	口頭発表	ポスター発表
第71回	岩手	2016年9月23日（金）～25日（日）	立身 政信	1,662	778	372	406
第72回	愛媛	2017年9月16日（土）～18日（月）	三浦 裕正	1,922	943	329	529
第73回	福井	2018年9月7日（金）～9日（日）	戒 利光	1,563	739	318	421
第74回	茨城	2019年9月19日（金）～21日（日）	田中 喜代次	1,918	826	338	488
第75回	鹿児島	2020年9月24日（木）～26日（土）	徳田 修司	741	447	なし	447

例年1,500～2,000名程度の参加者数で推移してきたが、2020年の年次大会は学会大会としては初めてのオンライン開催で、大会事務局・参加者双方の勝手がつかめず参加者数は伸びなかった。

2) 全国地方会実行委員会の分離：総務委員会の業務が煩雑で委員に過度の負担がかかっていたため、委員会活動の一部である地方会のとりまとめを行う業務を「全国地方会実行委員会」として分離した（2018年9月）。

3) 役員任期の見直し：平成26年4月1日付けで、任意学術団体日本体力医学会が法人化され、一般社団法人（一社）日本体力医学会となった。当時は「理事任期は2年以内で、再任は妨げないが、連続4期までとする。監事の任期は4年以内で、再任は妨げないが、連続3期までとする。」という規定が定款に記載された。しかし理事・監事および各種委員会委員の一斉交替による影響を鑑み、それぞれ「再任は妨げない」というように定款を変更した（2018年9月）。

4) シニア会員の設定：会員数減少の歯止め策の一つとして、長年体力医学会会員としてご尽力いただいたシニアの会員が少しでも長く会員活動を続けていただくために、年会費が半額 5,000 円の「シニア会員制度」を新設した (2018 年 9 月)。

5) 中富健康科学振興賞候補者推薦に関する見直し：「日本体力医学会の発展、啓発および普及に極めて貢献度の高い会員および名誉会員から候補者を選定する」というプロセスに従い、役職の執行状態を考え、貢献を公平かつ正確に点数化することにした (2020 年 9 月)。

## 2. 編集委員会

### 1) 学会誌の発行

現代のフィジカルフィットネスとスポーツ医学に関する査読付きの論文等を掲載する学術雑誌として、和文誌「体力科学」ならびに英文誌「Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFSM)」を編集・発行している。

フィジカルフィットネス、スポーツ医学、運動生理学と代謝、筋肉生物学、バイオメカニクス、骨のホメオスタシス、トレーニング科学、老化とストレス反応、健康科学、概日生物学、リハビリテーション、その他の学際領域の研究成果を収載し、「体力科学」は主に日本国内に向けて、「Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFSM)」は世界に向けて年間 6 号発行している。

なお、「体力科学」、「Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFSM)」共にオープンアクセスジャーナルである。

#### (1)和文誌 体力科学 オープンアクセスジャーナル

2017 年 Volume 66 No.1-6

2018 年 Volume 67 No.1-6

2019 年 Volume 68 No.1-6

2020 年 Volume 69 No.1-6

2021 年 Volume 70 No.1-3 (2021 年 5 月 21 日現在)

#### (2)英文誌 Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFSM)

オープンアクセスジャーナル

2017 年 Volume 6 No.1-6

2018 年 Volume 7 No.1-6

2019 年 Volume 8 No.1-6

2020 年 Volume 9 No.1-6

2021 年 Volume 10 No.1-3 (2021 年 5 月 21 日現在)

2) 英文誌 Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFSM) を Directory of Open Access Journals (DOAJ) に収載開始 2021 年 1 月

### 3) 特集号の企画

現代の体力科学に関連するフィジカルフィットネスとスポーツ医学などにおいて Hot なトピック (Hot spot) に関する特集として取り上げ、原著論文あるいはその他の原稿を掲載することで、当該分野ならびに関連分野の研究者にタイムリーにかつ有益な情報を提供している。これまで、発行済みの特集号は下記の通りである。

<体力科学誌>

◆第 1 回特集号、体力科学 67 巻 2 号 (2018)

がん：検診、ケア、予防、運動習慣化の意義を考える

◆第 2 回特集号、体力科学 67 巻 5 号 (2018)

エネルギー代謝

◆第3回特集号、体力科学 68 巻 5 号 (2019)

介護予防を考える

◆第4回特集号、体力科学 69 巻 6 号 (2020)

労働衛生分野における体力科学研究

<JPFSM 誌>

◆第1回特集号、JPFSM, VOL.7-4 (2018)

Aging and Skeletal Muscle Atrophy

◆第2回特集号、JPFSM, VOL.8-5 (2019)

Exercise and blood pressure: Towards better management of hypertension by exercise habituation

◆第3回特集号、JPFSM, VOL.10-3 (2021)

Global trends in high-intensity interval training (HIIT)

4) ヘルスフィットネス (健康増進、生活習慣病対策) からフレイル対策 (要介護化抑制策) や successful aging (健幸華齢)

実現に向けた医科学的 (体力医学的) 研究の発展が希求されている昨今、日本体力医学会はその重要な責務を果たすに相応しい学術組織である。かかる背景を受け、2019年には「医師・コメディカルのためのメディカルフィットネス」なる啓発書を発行した (社会保険研究所)。メディカルフィットネスという表記に関しては賛否両論の声があるが、多くの国民が身体的・精神的に不調を抱えながら長生きすることが必至の時代においては、医学的情報に基づくオーダーメイドの体力づくり支援 (メディカルフィットネスの実践) が肝要であり、上記の書においては肥満、糖尿病、高血圧、脂質異常症、高尿酸血症、肝疾患、腎疾患・・・などに向けたメディカルフィットネスのあり方を詳述した。

3. 学術委員会 (スポーツ医学研修会委員会、称号委員会、プロジェクト研究委員会、学会賞選考委員会、ガイドライン検討委員会、)

本学会における「学術委員会」の役割は、その定款の目的 (日本国内外における体力ならびにスポーツ医学に関する研究の進歩、発展を促進し、研究の連絡協力を図るとともに、その成果の活用をはかり、もって我が国の学術の発展に寄与する) を、学術面から遂行するための委員会であり、これまでに、「スポーツ医学研修会委員会」「称号委員会」「学会賞選考委員会」「ガイドライン検討委員会」「プロジェクト研究委員会 (2019年に廃止)」の5つの小委員会に分かれ、目的達成のための各種事業を実施して来た。

学術委員会が本学会の中において特に関連した事業は、定款の事業〔定款第5条(1)~(6)〕における、次の(2)~(6)であり、「学術委員会」内の“小委員会”がそれぞれ担当している。

(2) 機関誌 (編集委員会が担当)、その他の刊行物の発行 (学術委員会が主に担当)

※その他の刊行物で現在 HP 上に掲載されている書籍は次のとおり

- 運動処方 の指針原著 第8版 (2019年版)
- スポーツ医学研修会テキスト 第5版 (2018年版)
- 健康科学アドバイザー認定試験過去問集 最近6ヵ年 300題 (2016年版)
- 別冊「医学のあゆみ」健康寿命延伸に寄与する体力医学 (2020年4月30日発行)
- 医師・コメディカルのためのメディカルフィットネス (2019年9月13日 初版第1刷発行)

(3) この法人が関係する内外の関連団体との連絡及び協力 (ガイドライン検討委員会が他の委

員会と担当)

- (4) 研修会の実施と称号の授与（スポーツ医学研修会委員会及び称号委員会が主に担当）
- (5) 体力医学の振興ならびに、普及、啓発（学会賞選考委員会及びプロジェクト研究委員会が他の委員会と担当）
- (6) その他この法人の目的を達成するために必要な事業（学術委員会が他の委員会と担当）  
学術委員会内の小委員会が過去5年間（2017年度～2021年度）に、それぞれ担当して来た事業に関する詳細は、小委員会ごとに次の1.～5.のようになっている。

## 1). スポーツ医学研修会委員会

“体力スポーツ医科学”を学術的、体系的かつ実践的に学ぶ“研修会”は本邦において稀有であり、本学会が主催する「スポーツ医学研修会」の社会的意義は大きい。特に“医療従事者”による運動指導方法や運動処方 of 原理・原則の習得等の“卒後教育”として、また、科学的な運動指導が必要な“教育現場”での意義も高い。

このような社会的要請に対処するために、本学会は「スポーツ医学研修会委員会」を常置し、次の(1)～(3)の事業を行っている。

- (1)国民の健康・体力に関わる医科学的知識習得を支援する。
- (2)運動・スポーツ指導実践に伴う医科学的技能習得を支援する。
- (3)その他

この事業を行う具体的なものとして「スポーツ医学研修会委員会」がある。この委員会が行う「スポーツ医学研修会」では、運動指導の経験がない医師、看護師、保健師、臨床検査技師、(管理)栄養士、理学療法士などの医療従事者が、適切な運動指導が出来るように、運動処方の原理・原則などを“基礎コース”として座学で学び、かつ“応用コース”にて実践を行なう事で、社会に幅広く役立つ人材の養成を行っている。実際、本研修会受講者には医師、看護師をはじめとした医療従事者が多く参加している。また、関連する専門教育を担当している現役教員の受講生もいる。過去5年間の実績としては、「コロナ渦」で2021年度、2020年度は中止を余儀なくされたが、2017-2019年度の3年間で、延べ113名の受講者があった。

## 2). 称号委員会

運動指導の経験がない医師、看護師、保健師、臨床検査技師、(管理)栄養士、理学療法士などの医療従事者が、地域における運動指導員、スポーツ施設におけるスポーツインストラクター、学校での体育教師や競技スポーツの監督・コーチ・トレーナーなどの体育・スポーツ関連の専門家と協力して、適切な運動指導が出来るようにサポートし、安全で安心なスポーツ環境を提供する事で、国民の健康増進・体力向上に資する事は、我国の身体に直接関連する専門家の使命である。その意味において、他学・協会にて養成されている「健康運動指導士・実践指導者」や「アスレティックトレーナー」などの各種スポーツ系専門家とともに、本学会が養成・認定している「日本体力医学会健康科学アドバイザー」は、全国の医療従事者から高い関心が寄せられている。この「日本体力医学会健康科学アドバイザー（一般社団法人日本体力医学会の商標登録）」の“称号”認定には、“「日本体力医学会健康科学アドバイザー」称号授与内規の条件を満たす事が必要である。

“新規登録”のためには、“第3条1学会が行う「スポーツ医学研修会」（以下「研修会」とする）の全課程を履修し、所定の単位を修得し、修了試験に合格していること、2修了試験に合格し、学会入会手続きをしていること。”とあるように、上記の「スポーツ医学研修会委員会」

とも密接に関係している。また、この専門的能力は生命の安全に深く関与することから、その能力の維持・向上を担保する必要がある。このため、本学会では、称号認定者の“再試験”はしないものの、称号認定後の“活動状況”を厳密にチェックし、積極的な“再教育”のための研修会の受講を推奨している。この研修会としては、上記の「スポーツ医学研修会」がある。また、厳密なチェックとしては、称号授与内規第10条に示してあるように、“称号の登録期間は5か年間とし、学会が指定した教育企画に参加し、別に定める称号継続再研修基準単位を取得した者について称号の更新を行う。但し、3回の更新（称号継続期間が20年間）を行なった者の称号認定は、終身（日本体力医学会終身健康科学アドバイザー）とする”とあるように、「称号継続再研修基準単位」を設定し、再研修会としての「スポーツ医学研修会」の受講（含講師）、関連する学会に出席・発表、著書・論文の著述、現場における活動などの総合点数により行っている。「日本体力医学会健康科学アドバイザー」には、研修会への出席とその後に行われる最終試験に合格する事により“授与”されるものと、日本体力医学会の今後の発展のため、本学会への貢献が大であった会員に対し“贈呈”される「日本体力医学会名誉健康科学アドバイザー」がある。過去5年間の実績としては次のようになっており、多数の方々が“授与”、“贈呈”されている。

- ・2017年度：新規称号授与者6名、称号継続授与者8名、終身称号授与者5名、名誉称号贈呈者4名
- ・2018年度：新規称号授与者11名、称号継続授与者23名、終身称号授与者5名
- ・2019年度：新規称号授与者16名、称号継続授与者19名、終身称号授与者5名、名誉称号贈呈者3名
- ・2020年度：新規称号授与者5名、称号継続授与者5名、終身称号授与者7名
- ・2021年度：授与・贈呈は今後

※2020・2021年度分は、「コロナ渦」で影響を受けている。

### 3). 学会賞選考委員会

「学会賞」は、平成元年7月の日本体力医学会定例理事会及び同年9月の社員総会（日本体力医学会大会北海道大会にて開催）において、本学会の目的である「日本国内外における体力ならびにスポーツ医科学に関する研究の進歩、発展を促進し、研究の連絡協力を図るとともに、その成果の活用をはかり、もって我が国の学術の発展に寄与する」ことを達成するための一環として設けられた。現在の「学会賞」は、(一社)日本体力医学会の機関誌である「体力科学」(和文誌)ならびに「Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFMSM)」(英文誌)に掲載された学会員が筆頭著者の学術論文の中から、毎年、「学会賞(体力科学)」、「学会賞(JPFMSM)」、「奨励賞」の候補を選出している。各賞受賞者の“表彰”と“受賞者講演”は、毎年、原則として国民体育大会の開催地で、“国民体育大会”行事の一環として行われる学術講演会である「日本体力医学会大会」において行われている。過去5年間の実績としては次のようになっており、これらの論文は、国内外の多くの研究者に引用され、本学会の目的達成に貢献している。

(1)2017年度(第30回日本体力医学会賞)採択研究論文:

#### 【学会賞(体力科学)】

- ・研究タイトル:「酪酸摂取がラット骨格筋における糖輸送体 GLUT-4 タンパク質の発現量に及ぼす影響」(体力科学) 65 巻-1 号-②
- ・研究者:野中 雄大、他

- ・研究タイトル：「地域在住高齢者における縦断的調査への不参加および途中脱落に関連する心身機能と背景因子の探索」（体力科学）65巻-3号-③
  - ・研究者：長野 真弓、他  
【学会賞（JPFISM）】
  - ・研究タイトル：「Sex-differences in age-related grip strength decline: A 10-year longitudinal study of community-living middle-aged and older Japanese」5巻-1号-1
  - ・研究者：Rumi Kozakai, et al .  
【奨励賞（体力科学）】
  - ・研究タイトル：「4週間のn-3系多価不飽和脂肪酸摂取が運動時の脂質代謝に及ぼす影響」65巻-2号-①
  - ・研究者：石橋 彩、他
- (2)2018年度（第31回日本体力医学会賞）採択研究論文：
- 【学会賞（体力科学）】
  - ・研究タイトル：「地域在住高齢者における身体機能評価を用いた認知機能低下者抽出方法の検討」（体力科学）66巻-2号-③
  - ・研究者：木室 ゆかり、他  
【学会賞（JPFISM）】
  - ・研究タイトル：「DRD2/ANKKI gene polymorphism rs0800497 is associated with exercise habit in the period from childhood to adolescence in Japanese」（JPFISM）6巻-2号-5
  - ・研究者：Haruka Murakami, et al .  
【奨励賞（体力科学）】
  - ・研究タイトル：「日本人小・中学生における体力および肥満度と血中脂質性状との関連性」（体力科学）66巻-4号-⑤
  - ・研究者：城所 哲宏、他
  - ・研究タイトル：「経時的CT撮影による肝脂肪蓄積の評価と自発的運動の効果」（体力科学）66巻-4号-⑥
  - ・研究者：吉村 咲紀、他
  - ・研究タイトル：「アイシング処置がラット損傷筋の回復過程に及ぼす影響」（体力科学）66巻-5号-③
  - ・研究者：池崎 和海、他、他
- (3)2019年度（第32回日本体力医学会賞）採択研究論文：
- 【学会賞（JPFISM）】
  - ・研究タイトル：「The effect of advanced glycation end products on cellular signaling molecules in skeletal muscle」（JPFISM）7巻-4号-4
  - ・研究者：Tatsuro Egawa, et al .  
【奨励賞（体力科学）（JPFISM）】
  - ・研究タイトル：「競技力が高いサッカー選手の状況判断時における脳内情報処理過程-事象関連電位と筋電図反応時間を指標として-」（体力科学）67巻-1号-③
  - ・研究者：松竹 貴大、他
  - ・研究タイトル：「Reduction of voluntary physical activity in mice induced by toll-like receptor 7 agonist R-848」（JPFISM）7巻-3号-4
  - ・研究者：Eri Oyanagi, et al .

- ・研究タイトル：「Effects of eicosapentaenoic acid intake on denervation-Induced mitochondrial adaptation in mouse skeletal muscle」(JPFMS) 7 巻-5 号-2
- ・研究者：Kohei Takeda, et al .

(4)2020 年度（第 33 回日本体力医学会賞）採択研究論文：

【学会賞（体力科学）】

- ・研究タイトル：「一過性の上肢の有酸素性運動と骨格筋電気刺激の併用が動脈スティフネスに及ぼす影響」(体力科学) 68 巻-3 号-①
- ・研究者：石川 みづき、他

【学会賞（JPFMS）】

- ・研究タイトル：「Effects of combined therapy of ACE inhibitor and exercise on cardiovascular functions and morphology of the heart and kidneys in SHR」(JPFMS) 8 巻-5 号-6
- ・研究者：Masato Suzuki, et al .

【奨励賞（体力科学）】

- ・研究タイトル：「Effects of bilateral lesions in the central amygdala on spontaneous baroreceptor reflex in conscious rats」(JPFMS) 8 巻-1 号-5
- ・研究者：Kei Tsukioka, et al .

(5)2021 年度（第 34 回日本体力医学会賞）採択研究論文：

【学会賞（体力科学）】

- ・研究タイトル：「運転を中止した高齢者の身体機能，身体活動量及び認知機能特性 -福岡那珂川研究-」(体力科学) 68 巻-1 号-⑤
- ・研究者：古瀬 裕次郎、他

【学会賞（JPFMS）】

- ・研究タイトル：「Effects of combined therapy of ACE inhibitor and exercise on the development of diabetic nephropathy in Otsuka Long-Evans Tokushima fatty rats」(JPFMS) 9 巻-5 号-5
- ・研究者：Shinichiro Aoyama, et al .

【奨励賞(JPFMS)】

- ・研究タイトル：「Effects of acetate administration on endurance training-induced metabolic adaptations in mice fed high fat diet」(JPFMS) 9 巻-4 号-6
- ・研究者：Kohei Seike, et al .

#### 4). ガイドライン検討委員会

ガイドライン検討委員会は、運動、身体活動、体力などに関する体力医学の研究成果をガイドライン等として取りまとめ、広く社会に周知することを目的として、2012 年（平成 24 年）7 月 20 日に制定された本学会では比較的新しい委員会である。ガイドライン作成の検討段階にて、本学会が取り組むべき国家レベル課題として「生活習慣病の蔓延」と「高齢化の進行」があり、これらに対して「健康寿命の延伸」等を目指したガイドライン作成を、本学会の構成員である医師等医療従事者および非医療従事者（運動・スポーツ・栄養学等の研究者／運動指導実践者）を読者対象として進めてきた。これらガイドラインの出版は今後を予定しているが、出版の際には、本学会員以外にも広く世間の医療従事者／スポーツ研究者／運動指導実践者たちに役立つ社会貢献が期待される。過去 5 年間の実績として

は次のようになっており、本学会における他の委員会や他の学術団体との協力により、本学会の目的達成に貢献している。

- (1)2017 年度：各種ガイドライン作成に向けての準備を進めている。
- (2)2018 年度：各種ガイドライン作成の優先順位の方針を決め、その作成の準備を進めている。
- (3)2019 年度：本学会の渉外委員会とともに他学会との協力の下に、「生活習慣の改善における身体活動・運動に関するガイドライン」作成を進めている。また、本学会の会員の意見を広く取り入れながら、「運動療法ガイドライン」作成に向けた活動を行っている。
- (4)2020 年度：「生活習慣病の蔓延」と「少子高齢化の進行」が大きな社会問題となっているわが国における、「健康寿命の延伸」を目指した活動などを視野に入れたガイドラインの作成を、他の学術団体との協力も含めて進めている。また、2021 年夏に開催予定の東京オリンピック・パラリンピックを視野に入れた、「競技スポーツにおける安全対策、特に熱中症対策やアンチドーピング等についてのガイドライン」作成を、他の学術団体との協力も含めて進めている。
- (5)2021 年度：2019 年度と 2020 年度の委員会活動の成果を、本学会の「ガイドライン」として纏め、“広く社会に周知する”作業をしている。

※本学会が他の学術・競技団体（公益財団法人日本陸上競技連盟医事委員会連盟）と協力して作成したものは、2013 年 5 月に出版されたガイドラインである「マラソンに取り組む市民ランナーの安全 10 か条」があり、現在、HP 上に掲載され、広く社会に周知することで本学会の目的達成に貢献している。

#### 5). プロジェクト研究委員会（2019 年に廃止）

本学会の目的を達成する事業の一つである「プロジェクト研究」は、“日本人の健康維持・増進に関連した体力及び身体活動・運動”を主題とした研究であり、各研究者の役割を明確にし、多施設が共同研究を行うことにより初めて成果が出るようなものとしている。また、その成果として、“社会に対して、勧告、指針などの提言がまとめられるもの”とし、研究開始から 3 年以内でまとめ、学術委員会の小委員会である「プロジェクト研究委員会」の審査後に、理事会の承認を経て、本学会の機関誌「体力科学」および、毎年、原則として国民体育大会の開催地で、“国民体育大会”行事の一環として行われる学術講演会である「日本体力医学会大会」において公表することになっている。過去 5 年間の実績としては次のようになっており、多数の施設の研究者が研究プロジェクトに参加し、本学会の目的達成に貢献している。なお、2019 年度以降は、所期の目的を十分に達成したことから、理事会、社員総会の承認を経て終了する事となった。

- (1)2017 年度研究プロジェクト（2015 年度採択、研究期間：2015～2017 年）：
  - ・研究タイトル：「日本の子どもにおける日常の身体活動の実態およびその変動要因の国際比較に向けた評価法の確立」
  - ・研究者（所属）：田中 千晶（桜美林大学）、他
  - ・発表実績：2018 年、第 73 回日本体力医学会大会（福井大会）
- (2)2018 年度研究プロジェクト（2016 年度採択、研究期間：2016～2018 年）：
  - ・研究タイトル：「女性アスリートにおける股関節回旋と膝前十字靭帯損傷との関連性に関する研究」
  - ・研究者（所属）：安田 義（神戸市立医療センター中央市民病院）、他
  - ・発表実績：2018 年、第 73 回日本体力医学会大会（福井大会）
  - ・2019 年度～ 研究プロジェクトの終了



#### 4. 倫理委員会

基本的には文科省や厚労省などから出された倫理指針に基づいた活動であるため、他の学会の倫理委員会と大差はなく、本学会独自の活動や、特に学術的に重要な活動はないため、本項に該当するものは無い。

#### 5. 広報委員会

ホームページでは、日本体力医学会の理事長ならびに学術委員会が中心となって編集した学術刊行物（「別冊・医学のあゆみ 健康寿命延伸に寄与する体力医学（編集：日本体力医学会理事長 鈴木政登）」、「医師・コメディカルのためのフィットネス（編著：日本体力医学会）」など）を紹介している。スポーツ医・科学分野における学術的な知見をまとめた情報の発信は、医学および医療の水準の向上に寄与すると考えられる。

#### 6. 全国地方会実行委員会

交通の利便性向上にともなう学術活動の全国化とグローバル化の中で、地域環境の中での特に有病者や障害者、学童や高齢者等の体力科学的課題をボトムアップで提言できる組織としての地方会の活性を、相互の連携で支援している。北九州（2018年8月）、南九州（2018年9月）地方会を立ち上げたのについて、甲信越地区にも関東地方会の分科会を設けることを検討しており、全国にその活性を広める努力を続けている。

### b. 当該領域における国際的な役割

#### 1. 渉外委員会

体力科学・健康科学・スポーツ科学、スポーツ医学領域の国際学会(ヨーロッパスポーツ科学会議 (European College of Sport Science :ECSS, 米国スポーツ医学会 American College of Sports Medicine:ACSM, 国際身体活動健康学会 International Society of Physical Activity and Health:ISPAH, 国際スポーツ医学連盟 International Federation of Sports Medicine:FIMS, アジアスポーツ医学連盟 Asian Federation of Sports Medicine:AFSM, 韓国運動生理学会, 米国実験生物学会 Experimental Biology:EB, アジアオセアニア生理学会 FAOPS など)と交流事業を継続的に推進しているとともに、当該領域で今後の活躍が期待される若手の会員の参加支援(ECSS, ACSM など)を推進している。ECSS とは毎年 ECSS-JPFMS Exchange Symposium を ECSS の年次集会において共催し、本学会からのシンポジストを公募により決定し派遣している。また ECSS の若手研究者賞受賞者を本学会年次学術集会の国際セッションに招聘し学術交流を深めている。また本学会年次集会において毎年国際交流シンポジウムを開催し、当該分野の最先端の研究者を招聘している。

##### 1) ECSS-JPFMS 交流シンポジウム

###### (1).ECSS 2017 Metropolitan Ruhr:

Challenging Physical Inactivity in Childhood and Adolescence

シンポジスト：紙上敬太（早稲田大学）、鈴木宏哉（順天堂大学）

###### (2).ECSS 2018 Dublin:

Skeletal muscle as an endocrine organ -20 years of myokines”

シンポジスト：古市泰郎（首都大学東京）、相澤勝治（専修大学）、Bente Pedersen (University of Copenhagen)

###### (3). ECSS 2019 Prague:

## Lactate/Pyruvate Metabolism in Skeletal Muscle: Energy Substrates and Beyond”

シンポジスト：北岡 祐（神奈川大学）、星野太佑（電気通信大学）、橋本健志（立命館大学）

ECSS 2020 コロナ禍のためオンライン・交流シンポジウムは開催中止

### 2) 国際学会共催

(1) アジアオセアニア生理学会学術集会 FAOPS2019 神戸 2019.3.28-3.31

JSPFSM Special Talk 小平奈緒(相澤病院)・結城匡啓(信州大学)

(2) International Brain Research Organization 2019

Satellite for International Sport Neuroscience Conference 筑波 2019.9.18-19

### 3) 国際学術コミュニティへの発信

(1) ハンブルグ宣言 2021

学会メンバーが我が国における厚生労働省「健康づくりのための身体活動指針」策定メンバーを会員に有することから、世界でもっとも高齢化率が高い日本における子どもから高齢者に至る健康施策を積極的に発信している。2021年4月にはドイツスポーツ医学会が主催した「World Sports, Medicine and Health Summit 2021」において世界どこの国でもスポーツ指導者や医療に携わる者、行政などがタッグを組んで健康のために身体不活動を撲滅しようという「ハンブルグ宣言」に参加した(<http://www.jspfsm.umin.ne.jp/topic/20210430.htm>, <https://www.sports-medicine-health-summit.de/en/hamburg-declaration-about.html>)。

(2) 2020 横浜スポーツ学術会議(2020.9.8-12 Web 会議)

本学会提案企画シンポジウム Sports under the COVID19 Pandemic を開催した。国際陸上競技連盟(World Athletes)医事委員長 Stephane Bermon, 国際サッカー連盟(FIFA)医事委員 Tim Meyer をシンポジストに迎え、コロナ禍でのスポーツイベント実施の可能性と科学的アプローチについて議論を行った。

## 2. 編集委員会

現代のフィジカルフィットネスとスポーツ医学に関する査読付きの論文等を掲載するアジア地域におけるリーディングジャーナルとしての役割を果たしている。現代のフィジカルフィットネスとスポーツ医学に関する査読付きの論文等を掲載する学術雑誌として、和文誌「体力科学」ならびに英文誌「Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFMS)」を編集・発行している。「体力科学」には、がん予防策としての運動習慣化の意義、生活習慣病予防策としてのエネルギー代謝増大の方法、フレイル対策としての介護予防策など、日本体力医学会ならではの実践的側面からの貴重な解説を含めており、医療者の間で好評を博している。

### c. 活動からもたらされる社会的な意義

#### 1. 学術委員会

日本国民一人ひとりの充実した満足できる“生き甲斐”と、それを成就するための自らと家族、友人等の“健康長寿”を守るためには、生命科学、取り分け“医学”を中心とした医科学の総合的な発展が必要不可欠である事は、論を俟たない。

しかし、その医学を担う医師(含歯科医師)、薬剤師、保健師、看護師、臨床検査技師、(管理)栄養士、理学・作業療法士などの“医療従事者”が、その専門教育を受ける大学・専門学校生としての養成期間は、その専門知識がとてつもなく広く深い事を考慮すると、あまりにも短いといえる。このため、“医療従事者”の核となり活動しなければならない医師などの職種養成としての大学医学部

や医科大学では、学業期間が6年間と、他学部・他学科より2年間も長いにも関わらず、それでも不足している感が否めない。しかし、この6年間においても、それぞれの専門的知識を習得するだけで汲汲としており、とてもその周りにあり、自らの専門知識を支援するための准専門知識を習得する余裕がなく、「体力・スポーツ医科学（名称は専門機関によって異なる）」といった講義・実習が殆ど行われていないのが実情である。

また、“健康長寿”を支える具体的な方法としては、健康増進・体力向上に努める必要があり、さらにそのための方策として、“栄養・運動・休養”の三要素に、現在では、適正な生活習慣を実現するための“環境”を人的・自然的に改善することの大切さが謳われている事から、生命科学の総合効果を狙うならば、これらも合わせて習得する必要がある。近年では、これらの“栄養、運動、休養、環境”を充実させることで、本来の“医学、歯学、薬学”による成果をさらに向上させるエビデンスが多数出てきており、「栄養療法（処方）」、「運動療法（処方）」なる医・歯・薬学分野でのみ使用されてきた専門用語が、それぞれの域を超えて頻繁に使用され、違和感を覚えない状況や時代になっている。

このような状況や時代背景を考慮すると、多くの“医療従事者”の職務遂行において、生命の安全・安心のための適切な行動に影響を及ぼす能力は、専門職の養成期間後にも定期的な“卒後教育”としての“各種研修会”において行われることが必要不可欠であるといえる。実際に、多くの“医療従事者”のアンケート調査結果にも、その必要性が表れており、専門家としての能力の不足感が見えている。

このような状況や時代的要請といった社会的“付託”に対処するための中心となるべく学会が本学会〔(一社)日本体力医学会・日本医学会第39分科会〕であり、そのことは、定款第2章目的及び事業の第4条に、「日本国内外における体力ならびにスポーツ医科学に関する研究の進歩、発展を促進し、研究の連絡協力を図るとともに、その成果の活用をはかり、もって我が国の学術の発展に寄与することを目的とする。」と、間接的ではあるが、極めて明確に記載し主張している事からも明らかである。本学術委員会は、この社会的負託に対応すべく設置された“常置委員会”であり、「スポーツ医学研修会委員会」「称号委員会」「学会賞選考委員会」「ガイドライン検討委員会」「プロジェクト研究委員会（2019年に廃止）」の5つの小委員会に分かれ、この目的達成のための各種事業を実施して来た。中でもその中心となるのが、「スポーツ医学研修会委員会」と「称号委員会」であり、多くの“医療従事者”の職務遂行において自己能力に不足感の有る次の1.~8.のような内容を中心とした講義と実習による「スポーツ医学研修会」を行い、修了後に行われる最終試験合格者には、「日本体力医学会健康科学アドバイザー（一般社団法人日本体力医学会の商標登録）」なる“称号”を授与し、その能力を十分に所有している人材である事を証明する“顕彰”を行い、国内外に発信している。

- 1) 身体の発育（成長と発達）や疾病の予防・治療・リハビリテーションにおける栄養（食事）の大切さ
- 2) 運動の身体に対する医科学的効果”とこれを活用した“運動療法”・“運動処方”の原理・原則と基礎・応用に関する知識
- 3) 運動の効果を上げるための疲労回復法
- 4) 疲労回復だけでなく適度な運動や趣味の活動などで心身をリフレッシュし、明日に向かっての英気を養うために必要な休養の意味
- 5) 生活習慣を改善するための生活環境の改善法
- 6) ストレスの意味とその解消法
- 7) 体脂肪量・率の各種測定法と適切な肥満解消法

8)その他【「スポーツ医学研修会」の主な講義タイトル（講師により多少の変化あり）】

- ・〔基礎コースの主な講義内容：有疾患に対する運動療法の考え方（含 COPD、腎症）、高次脳機能と運動、筋骨格系組織と運動、循環と運動、幼児期および成長期における運動指導、運動・栄養・生活習慣病、運動処方基礎、運動器疾患に対する運動療法、心血管系疾患の運動療法および服薬者の運動時注意点、メタボリックシンドロームの病態と保健指導、など〕
- ・〔応用コースの主な実習内容：運動処方実習（a）・（b）：運動負荷試験（自転車エルゴメータ・トレッドミルによる予測最大酸素摂取量測定法、運動処方に基づいた運動プログラム作成法、運動による消費エネルギー計算法）、スポーツ傷害予防実習、など〕

## 2. 全国地方会実行委員会

各地域での体力科学の研究活動成果を、各地方会が随時市民公開講座の形で地域に紹介し、地域のニーズを汲み上げる場ともすることを学会として補佐・支援している。

## 3. 編集委員会

現代のフィジカルフィットネスとスポーツ医学に関する査読付きの論文等を掲載する学術雑誌として、和文誌「体力科学」ならびに英文誌「Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFSM)」を編集・発行している。「体力科学」には、がん予防策としての運動習慣化の意義、生活習慣病予防策としてのエネルギー代謝増大の方法、フレイル対策としての介護予防策など、日本体力医学会ならではの実践的側面からの貴重な解説を含めており、医療者の間で好評を博している。

## d. 学会運営上留意している点

### 1. 倫理委員会

本学会独自の活動ではないが、学会運営上、倫理委員会として過去5年以内に実施した（している）主たる活動は、以下の通りである。

- 1) 2017年より、倫理審査委員会が設置されていない機関に所属する本学会会員からの研究倫理審査の申請を、本学会倫理委員会で受け付けることとし、本学会ホームページ上に規程や書式類を掲載している。
- 2) 2019年より、「学術集会への演題応募における倫理的手続きの検討」を行っており、2020年の本学会大会（年次集会）にて教育講演を実施し、会員に周知を行った。今後、実態調査を行い、2023年または2024年より本学会大会の一般演題について演題応募時に倫理的手続きの確認を行うことを計画中である。

### 3) その他

2018年に「本学会理事及び評議員による診療放射線技師法違反に関する調査」を行い、本学会役員の不法行為に対して、学会として適切に処分を行う判断材料を理事会に報告した。

### 2. 財務委員会

学会の収入は主に年会費によるものである。収入金額の維持や増収のために一般会員の増員を学会理事や評議員から集めてもらっている。また評議員・理事など定年以後も学会に留まってもらうよう「シニア会員」を設定し減収に歯止めがかかるような努力をしている。支出を抑えるように、各種委員会の活動を見直し、支出をできるだけ押さえるように努力している。長年行っている「日

本体力医学会健康科学アドバイザーの称号付与」に関する研修会を続け増収になるような委員会活動を率先して支援していく。収支バランスの維持を目指し努力を怠らないように心がけていく。

### 3. 総務委員会

総務委員会には年次大会の大会長候補者を理事会に推薦するという役割がある。このため実際に大会が開催される2~4年前から地方会の役員などとコンタクトしながら、実際に現地に赴いて大会長候補者の状況を確認し、依頼をする。また、大会開催候補地の視察も行い、年次大会の運営がうまくいくように提言を行い、大会事務局の相談に乗る。

## II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる本体力医学会と他の分科会との連携による活動

### 1. 編集委員会

第58回日本リハビリテーション医学会学術大会にてどう医学会との連携シンポジウム

『“健幸華齡”に向けたリハビリテーション医療と体力医学：運動の効果とメディカルチェックの重要性』（田中喜代次&後藤勝正理事）を開催するなど、特に医療者のスキル向上に向けた体育科学的・スポーツ医学的視点からの社会貢献活動にも注力している。

### 2. 渉外委員会

日本疫学会、日本高血圧学会、日本循環器学会、日本腎臓学会、日本総合健診医学会、日本痛風・核酸代謝学会、日本糖尿病学会、日本動脈硬化学会、日本内科学会、日本脳卒中学会、日本肥満学会、日本老年医学会、日本神経学会、日本医学会連合と合同で2015年に設立された脳心血管協議会に参加し「脳心血管病予防に関する包括的リスク管理チャート2019」の身体活動・体力・運動処方ガイドラインの監修を担当した。

その他日本生理学会、日本抗加齢医学会、サルコペニアフレイル学会、日本臨床運動療法学会と年次集会における共催シンポジウムを継続的に開催している。

### 3. 総務委員会

本学会年次大会における他学会との合同シンポジウム開催や、他学会の年次大会における合同シンポジウムの本体力医学会からの参加などを積極的に行っている。

## [本体力医学会からの期待・要望]

1. 本体力医学会会員は医療機関所属の医師等医療従事者ばかりではなく、運動・スポーツ、体力医学、栄養学等の研究者や運動指導実践者など非医療従事者が多くを占め、高齢者の“健康寿命延伸”や生活習慣病の予防という観点から中高年齢者の運動啓発・実践指導等に携わっている会員が多い。しかし、非医療従事者であるが故に、法的に運動実施者の健康状態（血圧、血中脂質レベル等生活習慣病危険因子等の検診結果）を把握することはできない。医師が医療面接や臨床検査結果を見ずに診断・治療を行うに等しい。少なくとも本体力医学会主催のスポーツ医学研修会を受講し、修了試験に合格した“本体力医学会健康科学アドバイザー”の称号取得者には、形態計測や血圧測定、健康診断結果の一部（LDL-コレステロール、HDL-コレステロール、尿酸、空腹時血糖等）を事前に把握した上で、運動指導が出来るような法的緩和を望む。

有病者に対する運動指導は医療従事者に限定され、心臓や運動器障害者に対する運動はリハビリテー

ション領域の医師や理学療法士に委ねられる。しかし、医学部の医学教育カリキュラムには運動生理学、運動療法や運動処方などの基礎知識・技能は正規のカリキュラムでは取り扱われていない。管理栄養士教育では運動生理学がカリキュラムに組み込まれているが、“特定保健指導”に携わっている保健師や看護師教育では指導されていない。このような現状を鑑み、日本体力医学会では医師のみならず、運動を中心とした国民の健康・体力増進および病気の予防に携わる運動実践指導者、管理栄養士、保健師、看護師、薬剤師、臨床検査技師等を対象に“スポーツ医学研修会”を行い2019年までに30回開催されている。また、2019年には社会保険研究所から『医師・コメディカルのためのメディカルフィットネス』を刊行している。これらの事業結果は日本体力医学会独自で関連学会に紹介しているが、日本医学会からも日本体力医学会の事業“スポーツ医学研修会”や刊行物を日本医学会所属分科会に紹介して頂きたい。

2. “スポーツ医学研修会”を実施しての主催者の感想と、実習に参加した医師の“本音”を合わせて考慮すると、“医療従事者”の「スポーツ医科学」に関する基礎・応用知識の低さには驚かされる。これは、このような職種の養成機関で、これまでに殆どなされて来ていなかった事その原因と考えられる。また、一部の“医療従事者”には、その重要さについては気が付いているものの、養成機関での限られた授業時間を考慮した際の、重要性の優先順位が“頗る”低いために、授業の必須科目どころか選択科目（多くの養成機関では必須科目のみ）にも設置されていないためと考えられる。上記の本音を吐露して頂いた“医師”によれば、「研修会に参加して、スポーツ医科学がこれほど充実した内容になっており、分かったつもりでいた事の殆どが分かっていなかった！これからの医師には絶対に必要な内容であることは間違いのない事実である。医学部在学中に勉強し、体験し、体得出来なかった事を、是非、“卒後教育”の一環として、全国の医師達に受講してもらい、“非伝染性疾患 NCD（生活習慣病）の運動療法”として応用してもらいたい内容である。しかし、さらに言えば（出来れば）、先ず、最初に、医師だけを対象にした、所謂、医師向けの研修会をやって頂ければありがたい！その理由は、恥ずかしながら、医師の立場として、他の“医療従事者”達に、このような医師の実態を知られたくないからである！実習の最初に、研修会担当者から、『この中に“医師”の方はおられませんか、是非、お手伝い頂きたい事があります。』と問い合わせられても、手を上げることのできなかった自分と、複数の同業の“医師”達がいた事は知っていても、無能力の自分達の存在を明確にできなかった事実がある。日本医学会との共同主催で、このような研修会、なにかんづく、“運動負荷試験”とその結果としての“最大酸素摂取量”の測定又は“その予測法”（健康増進・体力増強の最も重要な確認指標の一つと考えられているため）等をやって頂ければ、参加したい医師が沢山いるはずである。」との事であった。その後、他の親しい医師達に確認しても、同様の意見が多数あった事から、この事は間違いのない事実といえる。医師が参加したくても参加しにくい状況であるならば、いっそのこと、日本医学会主催でこのような「スポーツ医学研修会」を実施すればいいのではないかと思う。日本医学会の第39分化会である（一社）日本体力医学会は、この要望があれば、大いに協力する準備は既に整っている。

3. 疾病（病気）の1次・2次予防としての診断（健診・検診）、疾病の進行抑制を図るための2次・3次予防としての医療（健診・検診の充実）とともに、老化・身体機能低下が進行した後期高齢者向けの寄り添いの支援策の充実を期待する。その一翼を日本体力医学会は他の日本医学会分科会との連携によって担えると考えている。運動や体力づくり活動は習慣化（継続的实践）が肝要であり、そのためにはスキルの向上や楽しさの享受が不可欠と考える。現行の医療（運動療法）には、その要素がともに著しく欠けており、患者の主体的行動変容につながっていかない実情であると推察する。

以上